

# 令和4年度入学試験問題

## 小論文

### (国際地域学科地域教育専攻)

#### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 「問題冊子」は1ページが白紙です。2ページから6ページが問題本文と設問です。
- 3 解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚あります。
- 4 解答は指定された解答用紙に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の指定欄に記入すること。
- 6 解答は横書きとし、指定された字数にまとめること。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外（下書き用紙など）は受理しません。
- 8 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。





**問題** 次の文章を読んで、後の設問1、設問2に答えなさい。

未来のある子どもたちにとって、何よりも学校を、安心できる場所、自分が出せる場所にすることが大切です。安心できる、自分を出せるということは、繰り返し失敗もできる、受け入れてもらえるという場所である必要があります。子どもたちとかかわる大人にとっても、校舎という物理的な空間の居心地をよくして、子どもたちが居場所だと感じられるようにする対策が必要です。

ここは自分たちの場なのだ、という愛着を持つことは、子どもの問題行動を減らす予防に役立つはずですが、それでは、自分らしさを探求できる、失敗も受け入れてもらえるといった教育空間はどのような空間なのでしょう。

日本の学校建築は、明治時代から、教室を直列に連続させ、その北側に廊下を配置するという北側廊下型の校舎を全国一律に整備するという方向で始まったそうです。北側を廊下にするということは、教室の窓を南側にして、太陽の光を入れようとした計らいのように思います。公平性が大切ということで、標準化、画一化されてきました。勉強の効率や、経済的に貧しい時代にたくさんの子どもに公平に早く校舎を造らなければならなかった事情があり、子どもの心の発達を考えての細やかな建築は難しかったのでしよう。

それでも、昭和になり、建物が老朽化し、子どもの気持ちや自発的な学びへの関心が高まり、建て替えや都市整備計画のタイミングで、オープンスペースや総合的な施設を含めた計画がなされるようになりました。学びの根拠地として四角い囲われた教室重視の考え方が未だ強く残る一方で、教え方や子どもの状況に応じた空間を自由に作り出せるオープンスペースが必要だと主張する取組みがなされ始めています。

とりわけ今は、自由で対話のあるアクティブラーニングの活用が強調されています。ある小学校は、オープンスペースを利用して、畳を敷いた空間をつくりました。たった4畳ですが、子どもたちは寝転がったり、カード遊びをしたり、ぺちやくちやおしゃべりしたり、休憩したりする姿が観察されました。子どもたちの知恵によって、思い思いの使い方がなされ、畳のスペースはダントツで人気のある場所になったといえます。

こうした子どもたちの心を考えたデザインが今必要だと思います。少人数化し、家庭の居心地感の方が断然勝るようになった現在、朝早くから長い時間過ごす学校に居場所感を持たせるためには、子どもたちの心の教育だけでなく、そこに影響する学校環境も改善していくことが求められます。

といって、学校の建物から新しくするという大掛かりなことは現実的ではありません。誰もができることから、まず学校を子どもたちのためにデザインするという視点を取り入れることから始めたいものです。たとえば疲れた子どもがのんびりできるソファをいくつか準備するのもいいと思います。暖かみのある色の柔らかい素材のソファは、愛着を持ちやすいものです。どこかのお家で使わなくなったものの再利用でも良いかもしれません。

今の学校には、気を抜けるスペース、自由が許される場所がほとんどありません。たいていの学校では、疲れ果ててしまう状態になって、ようやく保健室にいくか帰宅するしかなく、充電できる場所がそもそもありません。空き教室を上手に使えるのではないのでしょうか。

ちょっとしたDIY (Do It Yourself.) からの発想もあります。教室にふつうの戸だけでなく、猫が通る穴のような、四つんばいにかがまないと通れない小さなドアをつくった学校があります。すると、そのドアから楽しそうに教室に出入りする生徒がとても多いそうです。狭いところから忍び込むという体験だけで、教室に入るわくわく感が増すのでしょうか。

トイレに関しては、心地よいスペースになるよう、和式だけでなく洋式便座を導入するなど、かつてに比べて使いやすくなっているようです。全個室にして、用便の大小で冷やかされないように工夫されていると聞きます。

建物の増改築にはお金がかかりますが、それに頼らなくても、できることはたくさんあります。トイレのスリッパを子どもたちにカタログで選ばせたり、ガラスをただ切り出したような鏡に飾りつけをしたり、そんなことを考えさせるだけでも子どもはわくわくします。トイレのドアに月単位で順番に子どもたちの絵を飾っても良いかもしれません。

カフェやレストランでは、入り口のドア一つで、入ってみようかやめようかが決まるようなことはありませんか？ ドアの向こうに、居心地を求めています。自分がリラックスできる、楽しい気持ちにさせてくれる場所を求めているのです。

子どもの気持ちを考えてわくわくさせる場所をつくる一方で、怖くて、悲しくて、不安な場所をなくす工夫も必要です。学校を居場所にしたいのに、「こわい、ふあん」なスペースがたくさんあるというのは困ります。危機予防の観点から、そして居場所感のある家庭とのつながりを感じられるような空間デザインが考えられつつあります。

学校では、教職員の方々は朝から夜まででんやわんやです。学級崩壊、不登校、いじめなど、いろいろな問題が次から次へと起こります。授業の種類が増えたので、勉強して準備しないといけません。行事もあり部活もあり、準備時間がなく、イライラすることが多いようです。これは、いわゆる悪循環に陥っています。大人がイライラすると子どもにたちまち伝染します。情動感染という言葉もあります。言葉だけでなく、態度や表情、仕草などを通して、大人の潤いのない、トゲトゲした気持ちが学校に蔓延<sup>まんえん</sup>します。また、大人に心の余裕がないと、全体を見渡すことができなくなり、部分にとらわれがちになります。

こんな場合、「健康モデル」が役立ちます。病気になれば治療すればよいという発想だけでは、罹患<sup>りかん</sup>する人が増えてくると治療が追いつかずにパニックになります。ですから、今は毎年健康チェックをする、予防接種を徹底するなど、予防に力が入られています。生活習慣を見直すところから考えれば、免疫力が増し、発病する人が減り、みんなが安心できるわけです。その点、学校はまだ危機予防対策をまず徹底するというサイクルが十分ではありません。問題を追っかけるところから、ようやく重い腰をあげる場合が少なくありません。

まず一度立ち止まってみてはどうでしょう。半日でも時間をとって、教職員や保護者が校舎内をくまなく歩いて、想像力を働かせて危険そうなスペースを把握します。すると子どもたちが歓声を上げそうな場所、静かに充電できそうな場所、友達とおしゃべりできそうな場所、いろいろな光景も目に浮かんでくると思います。その中で、ちょっとここは怖い場所、不安な場所、できれば避けたい場所なども見えてくると思います。いじめの犯行現場になりそうなデッドスペースや、不審者の侵入を許すような出入り口など、

思わぬ「<sup>すきま</sup>隙間」に気づくでしょう。

子どもたちに直接アンケートすると良いと思います。実は、大人が一方向的に子どもにとって良いと思っていることは、子どもにとってありがた迷惑といったことが少なくないのです。カラフルすぎるお弁当や、ガヤガヤした学校放送など、感覚過敏な子どもにとっては耐え難い場合もあります。当事者に尋ねてみるということはいつも必要なことです。子どもたちの意見を取り入れながら、空き教室や、使わないトイレや倉庫などはデッドスペースにしないで、逆発想で、わくわくする空間に変えられないでしょうか。

子どもたちから聞いた学校の死角に、何か楽しい彫刻を設置するとか、「楽しく遊ぼう」といったプレートを置くといった試みはどうでしょうか。そんなことしても効果はない、彫刻を置いたらイタズラされるだけですよなどと、すぐ横槍を入れたがる人がいます。大抵そういう人は、もう童心を忘れています。こうした工夫は、工夫した結果だけでなく、教職員の目と思いやりが学校の隅々にまで行き届いているサインになり、何もしないより、大きな心の支えになるのです。家庭でも、冷蔵庫にマグネットで止められた一つのメモ書きから、行き届いた思いやりの気持ちを感じ取り、感謝の心を育てます。

どこの学校でも玄関、教室の中、廊下、体育館には、たくさんのスローガンが掲示されています。しかしそのメッセージは有効に、子どもたちの心に届いているのでしょうか。標語が書かれたポスターは誰のために貼っているのか、何年も経って色も変わってしまっている張り紙が多くないでしょうか。「子どもの目線」で検討するアクションが必要だと思います。

たとえば、学校の外に向けて貼られた「いじめを許さない」「あいさつをしよう」などの看板は、誰へのアピールでしょうか。校内にいる子どもたちの目に届くよう内側にも貼ったほうがよくないでしょうか？

教育環境をよりよく機能させるための取組みによって、教師の力量も磨かれます。子どもたちの「大人は何もしてくれない」という諦めを払拭し、「教職員はいろいろなことを考えてくれている」という安心と信頼をつなぎとめることができるのです。建築、デザインの工夫を、子どもたちのポジティブな感情に増幅できる役割は、やはり、それを仲介する人の働きが大切です。

教室の戸口にプレートをいくつかかけた学校があります。そのプレートには、子どもが入室する際に、先生とどのようなことをしたいかを示す絵（ハイタッチ、ハグ、握手、……など）が描かれています。たとえば、子どもがハイタッチを選ぶと、教室に入る前に、戸口に立っている教師とタッチをするという具合です。ハイタッチで笑顔になる生徒、ハグしてもらって喜ぶ生徒もおり、幼児や小学生は学びが楽しくなります。

「ウエルカム・プラクティス」という取組みを行っている学校もあります。「出迎え作戦」と呼ぶその活動は、長く休んでしまった子どもや転校生が登校する日に、「おはよう、〇〇さん」といったプレートや、楽しい飾りつけなどで出迎えるという試みです。久しぶりの登校には勇気がいらいます。みんなは受け入れてくれるだろうか、いじめられないだろうか、勉強についていけないのではないかと、といったさまざまな不安が胸をよぎります。出迎え作戦のプレートや飾りつけが玄関にあれば、明るく、前向きな気持ちで教室に入ることができます。

こうしたことは、学校だけではありません。働く場所や地域の復興にも関係すると思います。ある駅に降り立ったとき、ある会社に入ったとき、たとえば、数十年前の剥がれかかったポスターがだらりとして

いたらどうでしょう。その場所は、もう生き生きとした状態でないことを予測させます。犯罪心理学で、「割れ窓理論」という考え方があります。窓ガラスを割れたままにしておくと、その建物は十分に管理されていないと思われ、そこにごみが捨てられ、地域の環境が悪化し、やがては凶悪な犯罪が多発するようになるというわけです。家庭の玄関、学校や会社の入り口、地域の玄関である駅などの環境が、出入りする人たちの心に与える影響は大きなものなのです。

危機予防の視点は、教職員の配置だけでなく、動線を考えるだけでも人の安心感や生き生きとした気持ちを高めます。アメリカのある学校で、銃を持った不審者が、まず学校の玄関に近いところにいた校長とスクールサイコロジストを銃撃したため、リーダーを失った学校はパニックになりました。ただ、日頃から危機予防のシミュレーションを何度もしていたおかげで、各教員は子どもたちを、犯人に気づかれないように、あらかじめ考えであった動線で安全な場所に退避させることができ、さらなる悲劇を生まなかったという事例です。

安心させてくれる人の配置や居場所の明確さ、何かあっても大丈夫と思えるような情報の与え方、メッセージの送り方はとても大切です。

(出典：渡辺弥生 (2019)『感情の正体』筑摩書房より抜粋、一部改変)

設問1 「子どもたちの心を考えたデザイン」とは何か。また、そのデザインが反映されたのほどのようなところか。本文の表現を用いて151字以上200字以内で説明しなさい。(150点)

設問2 ある小学校で、児童会から「学校がもっと楽しくなるように、空き教室(児童数が減って学級数が減ったために、現在は誰も使用していない教室)の一つに卓球台、トランポリン、ソファを置いてほしい。昼休みと放課後に全校児童が自由に使えるようにしてほしい。」という要望があった。児童会がこの案について全校児童にアンケートをした結果では、低学年(1～3年生)は賛成3割、反対7割、高学年(4～6年生)は賛成9割、反対1割であった。

この要望について、「子どもたちの心を考えたデザイン」の観点やアンケート結果を踏まえながら、良い点と問題点を述べなさい。そして、あなたがこの学校の教員であったならば、この学校のデザインをどうするか、考えを述べなさい。なお、文字数は全体で601字以上700字以内とする。(250点)



